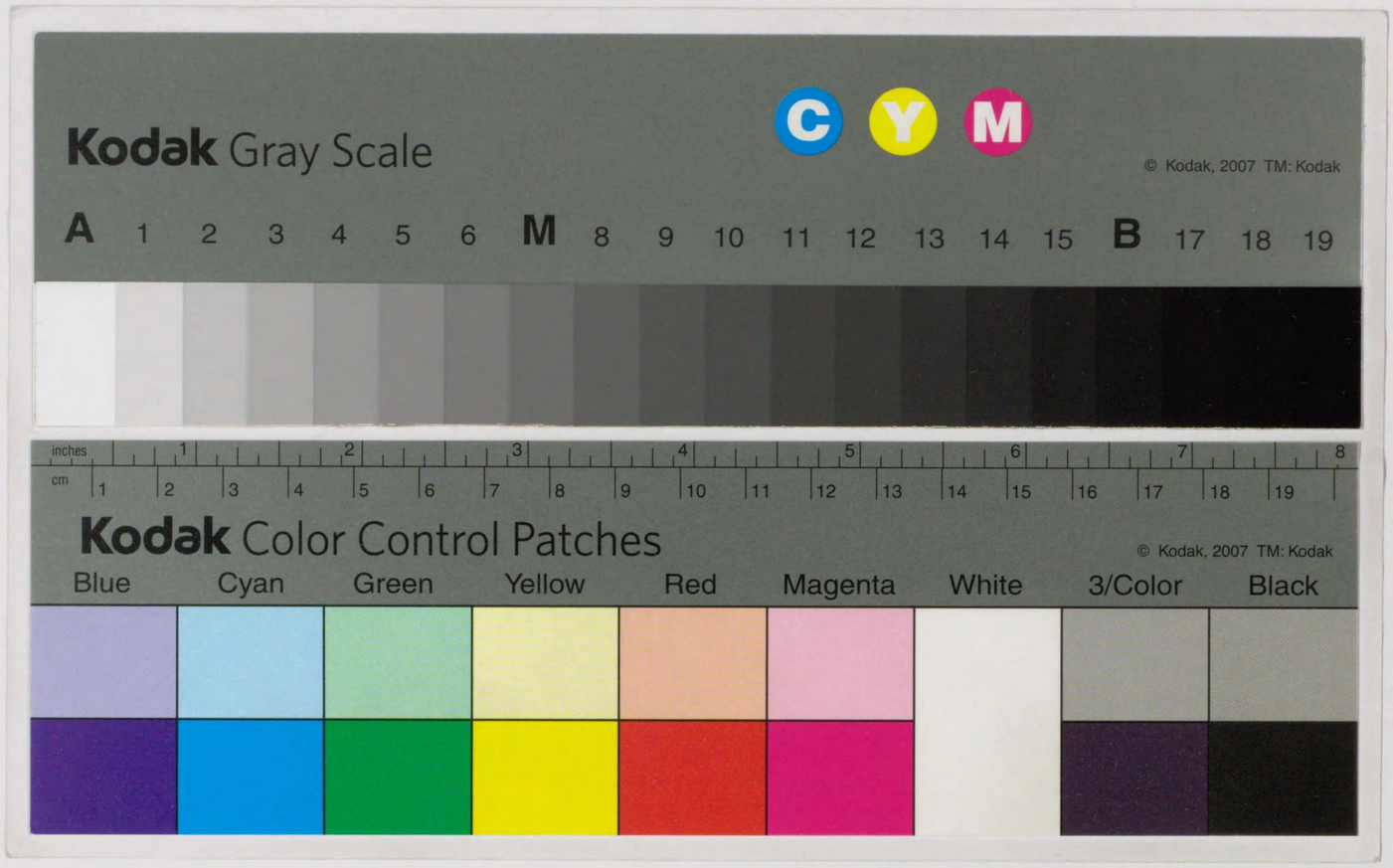

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

雜波濫第六　目録

盃冬自　并無邪月

孫菊憂

十夜始

日蓮御名謙

恵比須祭

弟子

東西本願寺御事　并東山

清水焼　并内侍所御祭

[illegible]道祖祭

大正
13.6.13
内交

明廣申
神宮ヲ修ム
遷儀 并ニ宮号ノ勅答 奏議




第十六 巻

○十月一日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十一日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十二日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十三日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十四日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十五日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十六日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十七日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十八日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○十九日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十一日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十二日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十三日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十四日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十五日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

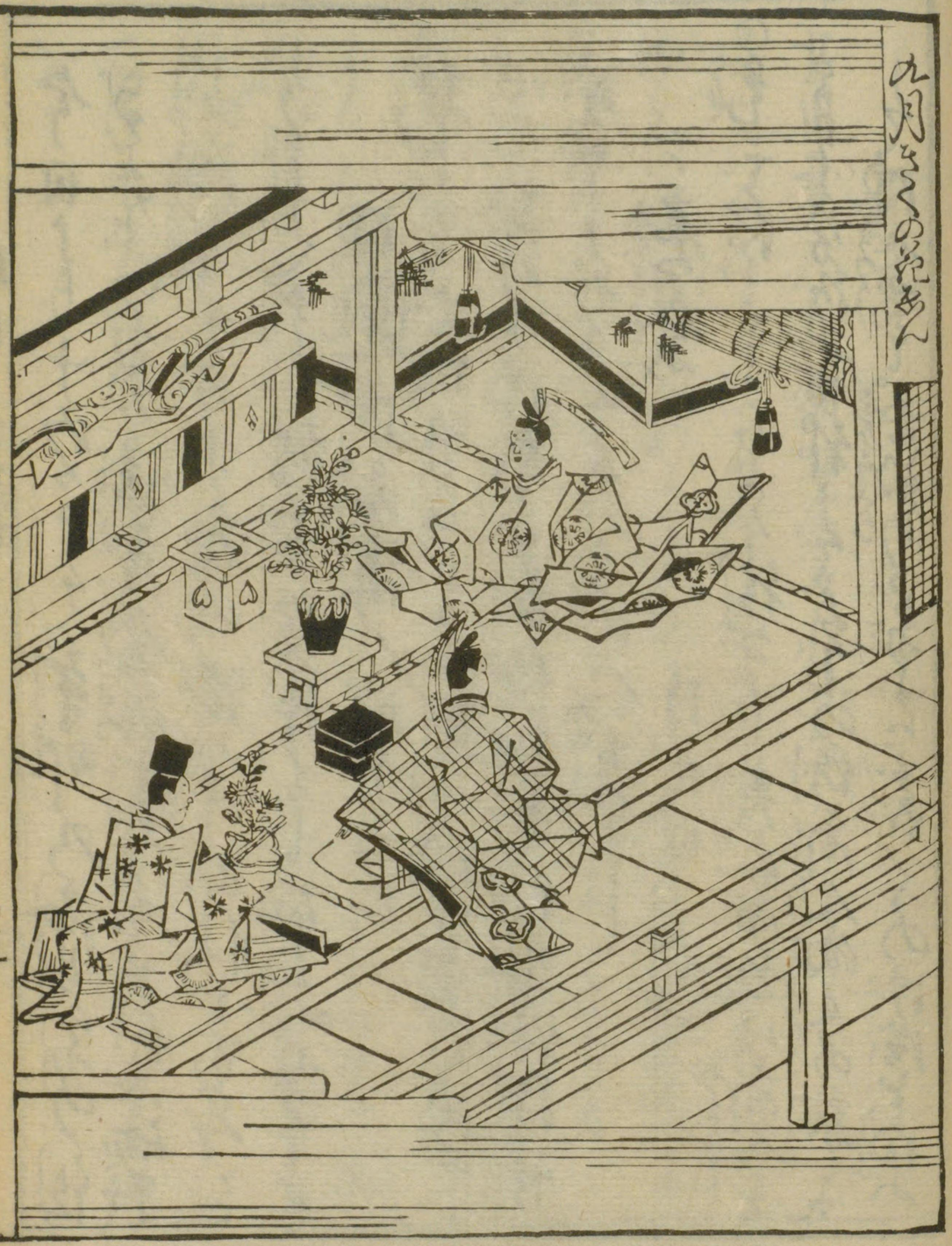
○二十六日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十七日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十八日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○二十九日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。

○三十日ハ先帝ノ忌ニ当ル。例ノ如ク御斎会ヲ設ケラレ、且ハ天下ノ僧尼ヲシテ、各一人ヲ度セシム。






きりさしめんが為ぬ取りてこれをまたしたまたしば二年を
十月と儀り。出雲ゑるんの夜あかとおくんと宣ひ
しまよりて十月にハ。結婚出雲に行て俗人
きてまつるとく。此ちの所を
出雲にハ神在月といひしを
神在月とや申すよいふ事 理信
殘菊宴 同六日
○菊花のえんハ。九月九日ぬくぬくまた殘菊乃
宴として十月のまおこなり勞給へるとく。是も
拜臣詩をつくり。儀をまゐふて二年陽にひと
しきよし
十徳始 同七日

今日より。十四日まで。寺町乃御ちゃの法
ぢゃなどのつゞき。諸義念仏ありぬれば。無量
壽經よ。千日十夜の御ありぬれば。
ちゃとくぼて。報恩教經なし。本文あるとて

日蓮御名講　同十三日

○熱じて大坂のうらに。日蓮一流の寺く。六十
四ケ寺あり。此寺に。豊橋。花香。灯明講經。法
義なとあるとて。まつりの人多し

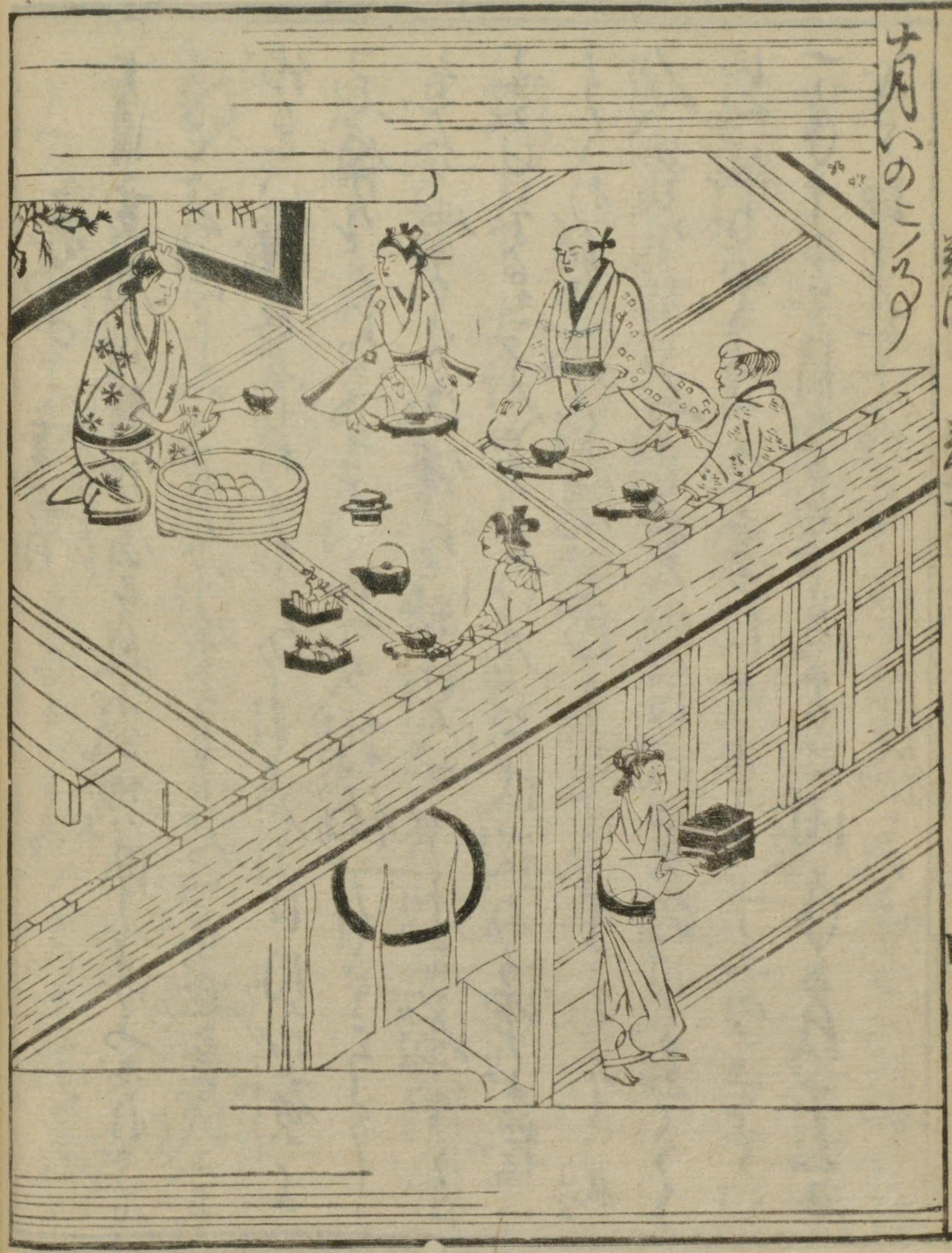
夷象　同廿日

○兄さんとさごめたら祐なし。夷三郎ハ。商人と
まりし分始ふ。此祐とて。ゞ下の法商人油くの家に。
して。門象にて。夷船ある家にハ。名くの法法を尚ふ

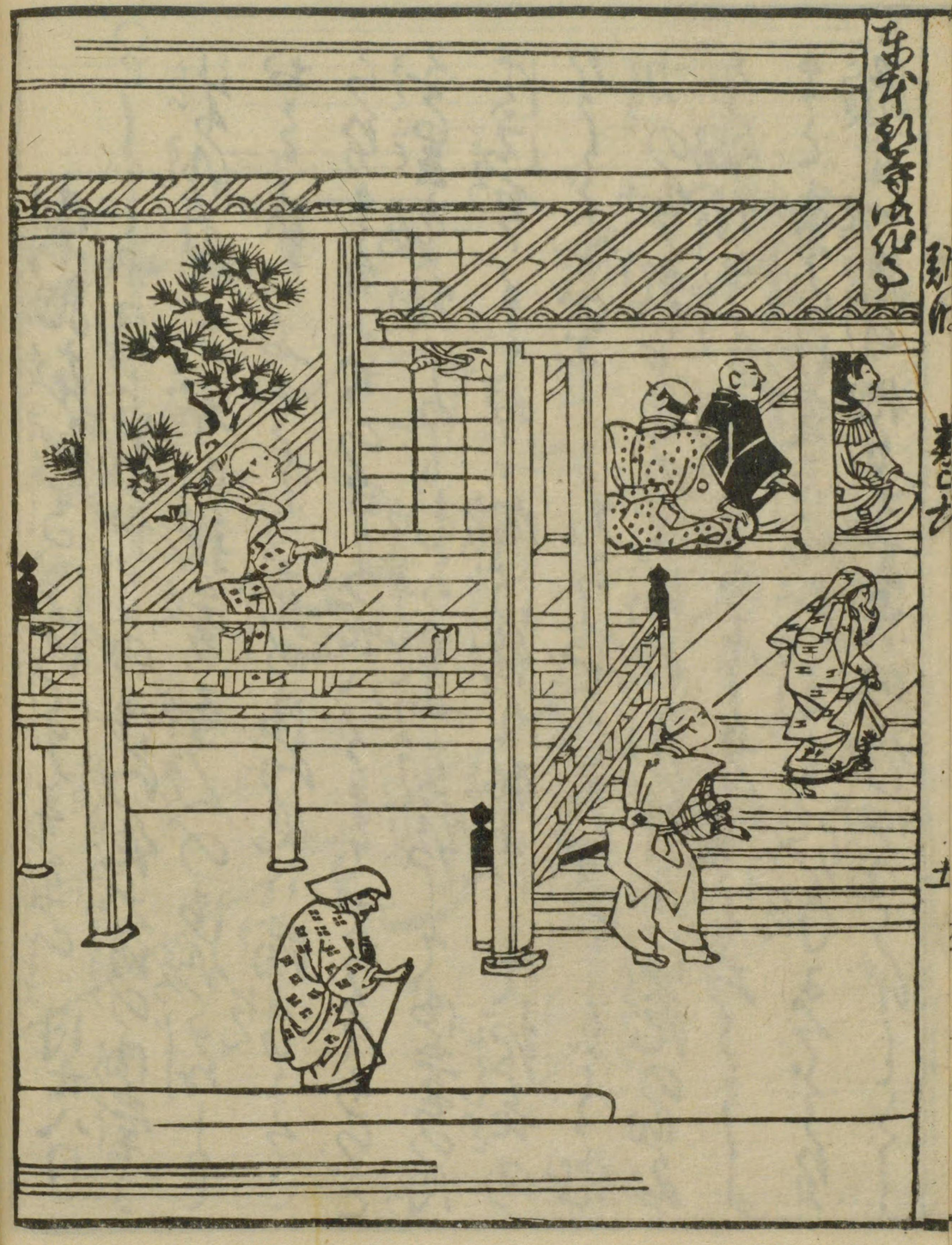


豕子　二寅の日

○十月寅乃日。餅を食まれば。病なしといふ。ぬれども
はとゝつのよろしかたじまるとも見べき。延喜式にも。
佐世ハ。洗古よりあるとなし。今日門蔵寮よ
こ。餅をそなへまつる。朝餉にて。さうしあし
そなふ。まこ此餅を。おけんでうとて。くしう
ぞうきまつるへ。まこいろこれ説ある事に。特ハ
くあまこの子ぬ。うむそりさるよりて。如
人兄をうしやう。寅の月此寅の日にあたる
ゆへ餅をいふ。寅はうしてゝ。十二の子とうむ。
一年十二ケ月をうじる。まこ國年にハ。十三子
をうむとん


月いのこゝろ

東都本郷る清水の清水の清水を
○さしぐ。十月廿八日本郷る清水の清水の清水を
朱脇あるて。野山親鸞聖人の清水をとる
おこなひ給ふ。そこゝ。本の清水は。蒲原よくて
ら勢き多ふ。廿ろよう。廿ろまて。一ちる此あらど
手墨を持よりも。老女男女年給して。清水の内
は流せしまて。おし合。清水を。秋雪して。親鸞の
なるべとかがしよろまふ。一文。五郎のともがら。他
力の本郷とまのこ。好住産所に。深泥の所
を蝸牛生きへしとのまゝ此れ祝も。たゝとし。
まて東山仏光寺の此の主も。清水にぞゝ勢
見も一流の他力を寅の信心をうばしこ



仏恵報樹のまゝかけ。梅名今仏をさたく
ロせとの御母乃おとしもあるまとしおなり
こゝく
清出焼 并内侍所清神示
○大坂四くの宮社にをらて。青月は。神出ハ
きれてきてまつる。是代清出僕とて。代人も
あつまりきてまつる。ゝ書社く
高津宮 八日
玉造稲荷 八日
新清霊 十日
生玉明神 十二日
稲荷明神 十三日

三津寺八幡 十三日
産摩明神 十六日
釣日宮 十六日
神明 楓稲町 十六日
天満宮神 十八日
同袈裟町神明

さてまゝ神ハしてゝ。清神の前にてゝ。ゝ
しかるて。是ハとてじめしやうぐらん。相神ハ
ゝ照大神の男ハをさしてゝ。おりゝ如ひし時清神の
初ロられけるに。細月命まさ見のかづらをかざしとし。ひ
かげと。ゝ。まさしてゝ。ゝ。ひ産出をきさしゝ。ゝ照
大神天の男ハを出ひしより。清神けをこのゝ如ふ。
今し内侍所にて。仏りし。清神示のゝまゝ仏りん

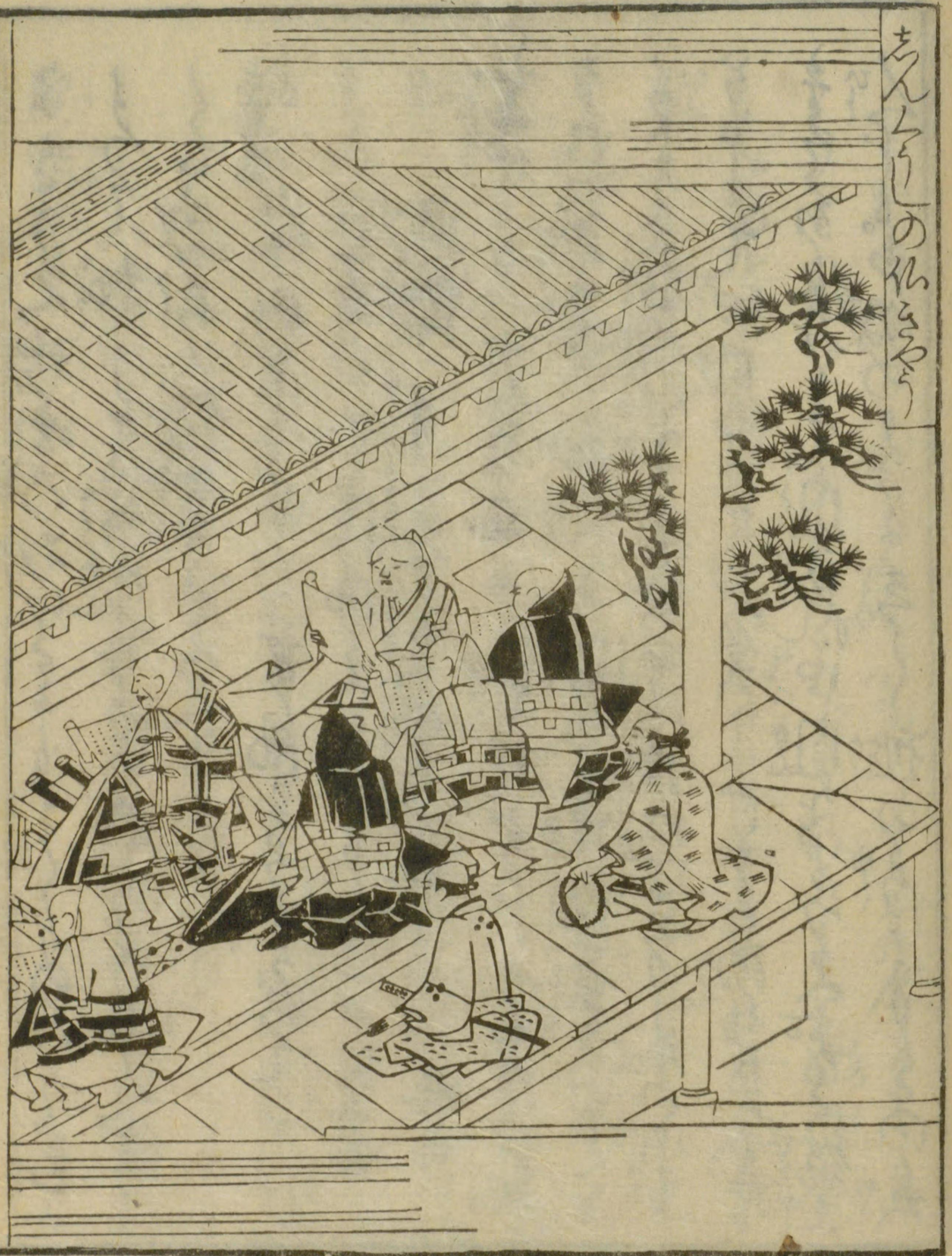
是は一条代の御時よりはしまるゝ。まことに神
まつりそ。なほめし。但おりしろかれとゝ。
おりひ出しまゝ。ちんもそろし
年行事 宮合 のあめ代むしのりしあきひ
今も雲井にこゝふちゝゝな　自世
天王寺道祖祭　同十六日
○此日は。てゝゝゝの村里の辻しよ。ちらしべとも。集
飛て。密の神をまつるとて。行事のくるよ。
をとる出ざしまば。此所を遊ざざして。剰ちん
よとゝつき。鄙深さ勢しとゝや。是を道祖祭
とゝふ。是道祖は。是の神まつりもや。今しはとゝ
しるとゝゝ。此日はぞしよ朱して

納庚申

○そもそもの庚申は。諸国の本ちゃく一と第のうちに。六度づゝ。潤あるゆゑは。七庚申あるを。なまはしても。所願あり人。一色とは。なまく願ふとて。氣後の人。納庚申まゐも。願成就いたす。おもひ此庚申まゐでこと。群集して。十二燈くとよづれ。竜も喧く。七いろの菓子くとうるゝ。急もいそがはしさてまく。今日我を称ざるとは。三マノ玉にあがりて。人の苦悩を告ぶまゐて。夜をまゐりて。称侍しねとうや

出やしてなゆうやもうふみのえきう

芳かを私こ称やうねうん





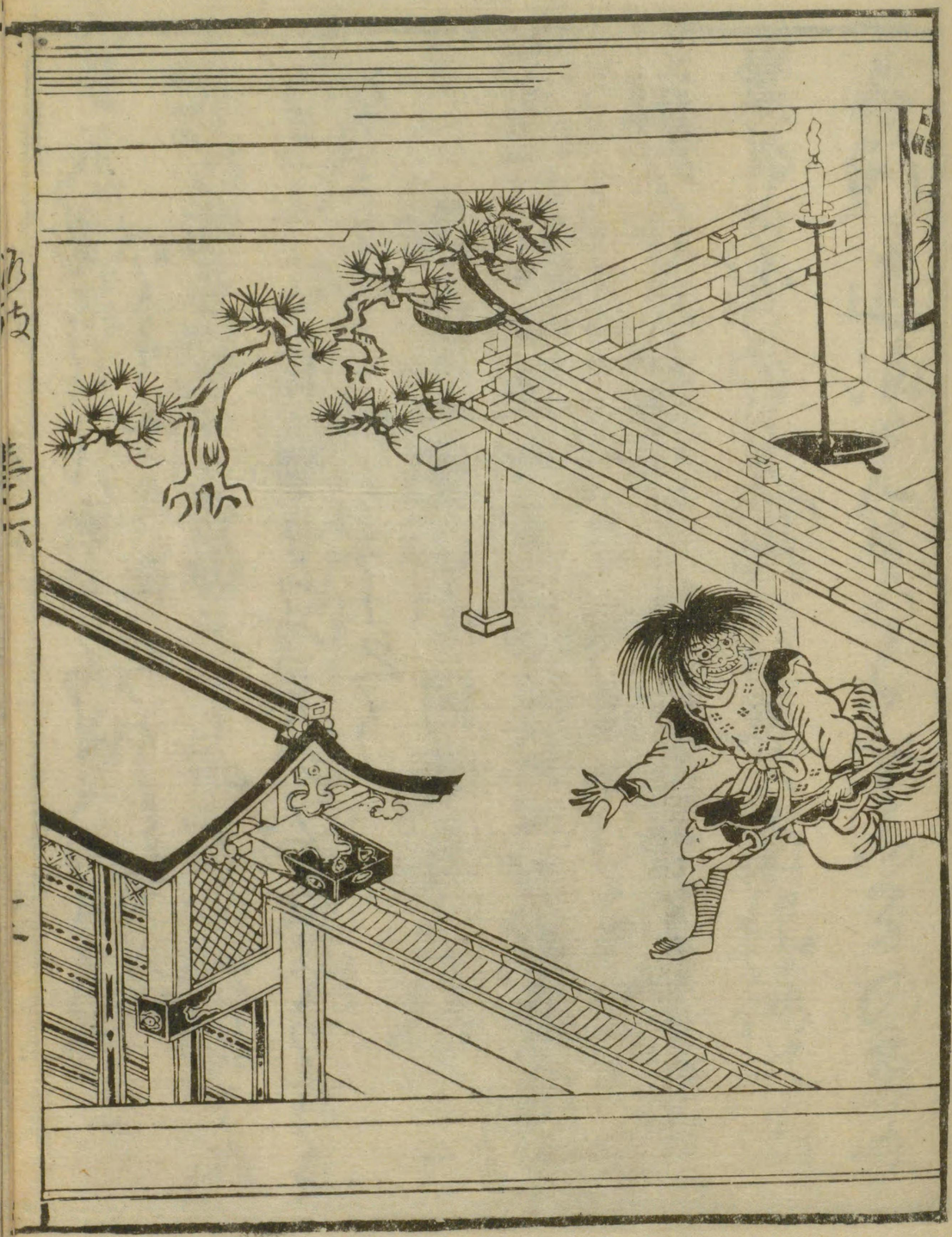

## 神宮寺仏名

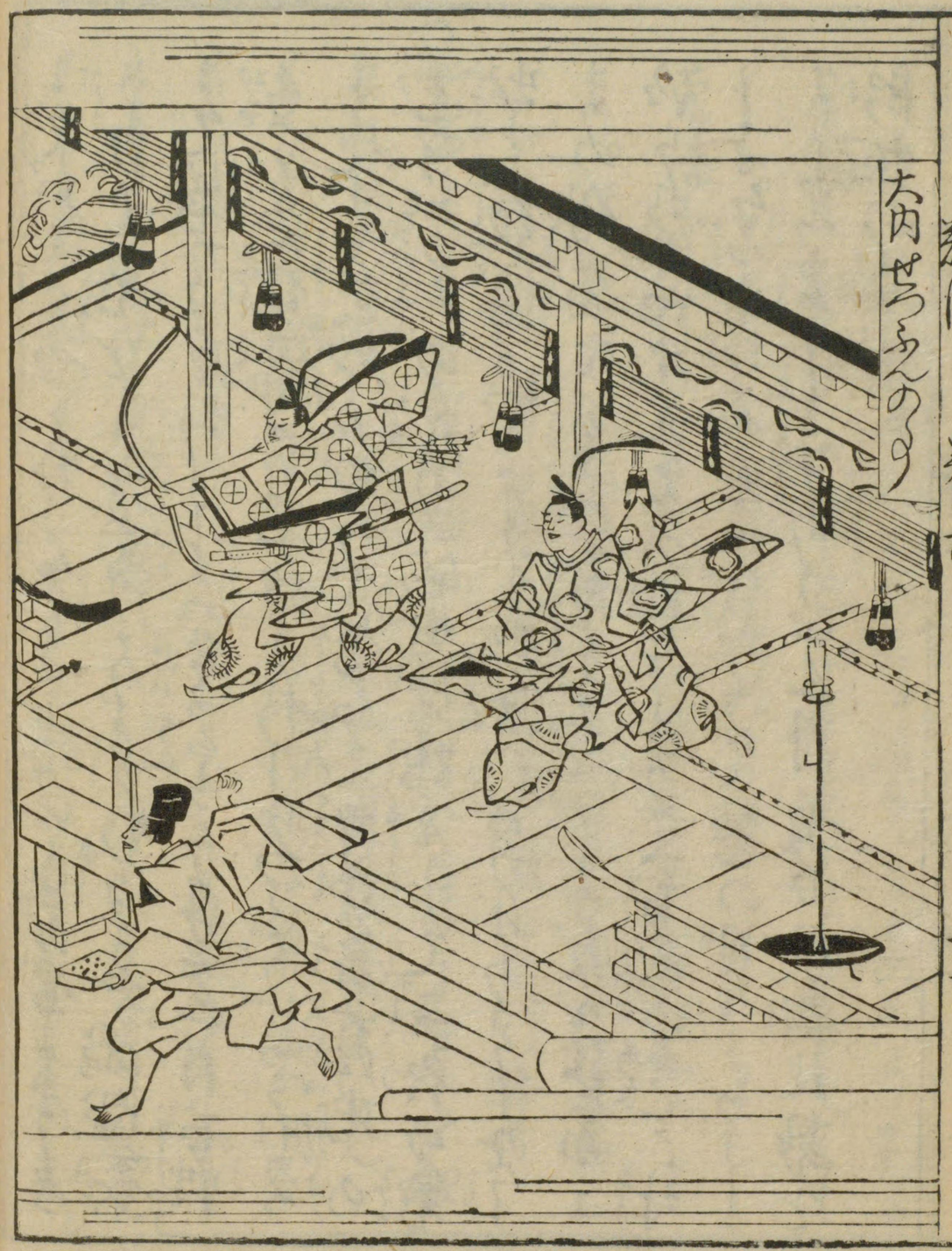
同十九日

○當ちまたをらて。むしよ三子仏名理を。涌しおふ
とうや。是刈信吾明神の清清ホ代為まとるとお
こそまつるしとん。さきは。紫中の内仏名は。十二月十九日
より。せつるまて。三十日くおるひは。一夜も例あり。
此仏名とふは。三世法仏の名号成とまくて六根
のつくを滅すら心くまとに仏名理まとうるし四
切法をうるとなる仏まや。寶飛の事。十二月より。を
じまる。義和のころは。おしぐと。仏名三十日の号
法唱して。鞍生紫の乃よし格まれてくり。まこ
釋の鄭家とはせしは。比良の山まて。十二仏名
理をよして。引沙修懺しおふ。さて後帝の歌

まきらえ。諸君乃あつくまもきくりのあり。是は
よつて。勅して。僧都をそまりけるとんぞし
くれ。元亨釈書に見へたり
古石書
河竹のすゑ〳〵葉風にしられて
三世の仏法法の代きくるは　宝家
追儺　并蓋大夫鶴育大戦さまるす　晦日
○葉中にハ。十二月晦日に仍ハ今日ハ夜やらふ事
なれば。鬼の夜仍ちるゆへに。陰陽家さいのんと
よくてら御以下是故おゝ。御所にとりしゆへと多
そもして。四月ありて。おそろしげなる。御をきて。年に
きてわとをりて。内裏此四門をまつるへ。おこ殿上
人ども。出殿のうちに。三つく。桃のうちよりきの矢

まて。いたらふ。これをとくとりて。鬼分にましめ
うちて鬼をたらふるすたじまわるまや。此内裏
まで。鬼をしられしてしれ。先の年二年十二月百性
多く。寝病にたまやまきれしゆへ。たじめられる
とん。まと鶴るのおく。僧正の名御菩薩池の
気に。二月大の夜あり。蓋陽物をとて。二夜の鬼
出て。朝にいるべきよし。時の門のつげあるしをう
まの別当宮多の帝に。奏しなれば。法家に
伝られて四十九家の地をとりて方丈の夜を封
じ。三十の年のまゝ代いりて鬼の月をうらし
よし。しるせし半あり。十二月晦日の夜此鬼を
肥恒のことに




大内せうふんの

罷まいしも都のこゝろのうさに代
ねさてや今夜くるゆらん
今此世に節るの夜いとしのうしら。お我を折
まさまして。閑氣とうしら。罷の人をぐくりんとて
ふとぶ節く俳たるとうり
隣白木焼るす　同晦日
○おなしく此夜白木をしてゝは。白木は風宗
をさる業まて作るゆへ。弾蓋あしきがゆへ。夜
痛の神乃夜仍まる夜なれば。気をまさまてなぞて
ましめしがあまて。作るとん

一新道治先生はこゝろを志るの事の
異なりをしし我住方は南紀諸此関
を通くまゝ。那波津は嘆やけ花の
白けもなくしく。我家にて寄かた
らひ作りこゝろ乃はりしかゝ接する
文句にて乃作りしは志の京共もし
ちかと皇をこゝろ言くさをむすひ
皇居のるまよう人名付て難波鏡

中行事の心にあり元来家翁長
和頼乃君に入りたまふ玉津鴻祐代
其事をくらうしは我藉乃編 粹
涌てあるべきし誠に賢は粗忠
を眸を欲せしに家侵すんものへ
集て加きかしは其世は偶元是志
なるに先生を敬爾をんかに業とし給
爾は是にあり早近粗淺なるに

辞し給ふを命志ぬくしに梓に鏤め
婦人小子乃覩ひしものなるんとおもふ
南畔の拾洞はしに海志をく硯をなし
して老乃筆を後に書くいふるものなり

延寶八申親月日

南湯山人自菴齋

大坂本町五丁目御堂筋角

小濵屋七郎兵衛板

同業

近江屋次郎右衛門

古版地誌刊行會」は曩に「蘆分船」を完成し、今茲に此の「難波鑑」を完成しぬ。大阪の名所圖會として最も古きもの、大阪の年中行事を記せるもの、おもへば二百五十年の昔、延寶時代の我が浪華の地理を知るべきは曩に完成したる「蘆分船」にて、我が浪華の當時の風俗を窺い知るべきは此の「難波鑑」也六巻なり。殊に「蘆分船」に一る稀なる此れ「難波鑑」は、崑岡の珠玉として真に珍襲すべきもの、あかも予が苦心空しからずして、これ復刊「難波鑑」の出来栄が先に領ちし「蘆分船」よりも更に強度ふ原本の面影を傳へ得たるは心竊かふ滿足を感ずる所なりとす。

否、予が心に滿足を感ずるは、唯單にそのみにあらず、原本「難波鑑」也板元が大阪の書肆にして、二百五十年也今日、こゝを復刊したる予も亦大阪書籍商の一人たることと深き機縁の存するもれと思へば、予が心中には言い知らぬ一種の感懐の浮び来るもれなり。

否、否、更に今一つ予が心ふ深き滿足を與ふるもれは、二百五十年前、原本「難波鑑」の板元たりし小濵屋、近江屋両書肆の所在地本町御堂筋は、こゝ實に予が此也生をうけて、幼年時代を送りたりし我が家と、目と鼻の近きところにあり——ことは、佛家の所謂宿縁の存する所と思へば、予が胸裡に名状し難き喜悦の情の油然として湧き出づるもれあるを。

いささか記して予が心れ滿足を述ぶ。

大正甲子初夏　だるまや書店主人

木村助次郎志るす

大正十三年五月十五日印刷
大正十三年五月二十日發行

第二回配本

難波鑑

古版地誌刊行會代表者

木村助次郎

大阪市南區南炭屋町廿五番地

編輯印刷兼發行者

大阪市南區八幡筋木綿橋東入

だるまや

電話南四九四九番
振替大阪貳一七〇〇番

發行所

163
2
91

帝國圖書館藏